

未来への想い

「ヨットと山の奇跡」

震災遺構 請戸小の爪痕

浪江町の「震災遺構 請戸小」の公開が2021年10月、始まった。東日本大震災から11年が過ぎ、記憶の風化がみられ、津波の被害を知らない世代も増えている。ジャーナリストスクール第5班は、遺構の管理を担当する浪江町教育委員会の渡邊祐典さん(36)に請戸小を未来に残す意義について聞いた。

震災遺構とは災害の記憶を後世に伝承するため、被災した建物などを整備・保存・展示する施設だ。請戸小は県内で初めての震災遺構で、津波で被災した校舎がそのまま残されている。海に面していた請戸地区は、津波で請戸小の建物以外は流され、壊滅的な被害を受けた。地区は



津波に襲われた教室。残された鉄骨が曲がっている

校舎は鉄筋コンクリートの2階建て。写真右側の壁面には太陽と海のイラストが描かれている



校内すべての時計が午後3時37分を指して止まっている



請戸小のシンボルの一つであるヨットの帆の形をした展望台。中央部には津波到達地点のプレートがある

と、教室は泥まみれで、頑丈なはずのドアや窓が壊れてなくなっていることが分かる。流されてきたがれきが、そのまま残されている部屋もある。体育館の床は水の重みで抜けていた。津波の強い力で丈夫なはずの鉄の柱も大きく曲がっていた。水が入った跡は2階の床まであった。職員室にあった時計を動かす機械も壊れ、校内全ての時計の針が午後3時37分で止ま

っている。海外から訪れた見学者はその被害の大きさに驚き「クレイジー」と言うこともある。県外や国外からの訪問者にとって、震災と言えど東京電力福島第一原発事故の被害の印象が強いようで「津波被害の記憶の風化が進んでいるのでは」と渡邊さんは心配している。

渡邊さんは「津波や地震によって引き起こされたありのままの被害を見てほしい」と訴える。遺構にはあの日の記憶が残され、津波の恐ろしさを今も語り続けている。

(大津・須田・大原) 請戸小は常磐道浪江インターチェンジから車で25分。入場料は一般300円、高校生200円、小中学生100円。問い合わせは震災遺構請戸小(電話0240・23・7041)へ。

「身近な災害にも意識を持って」

請戸小は迅速な判断と避難で、学校にいた全児童82人が津波から生き残り「請戸小の奇跡」と呼ばれた。避難にあたった当時の教務主任、佐藤信一さん(57)に「現なみえ創成小教務主任」に避難について聞いた。

佐藤さんは震災の日、体育館で5年生と卒業式の準備をしていた。運動の午後2時46分、体育館や1年生教室、2年生教室などのいすが「ガタンガタン」と揺れ始めた。揺れはこれまでになく大きく何度も続いた。校舎から海までは300メートルしかない。津波警報や近所

の漁師の提案を受けて、発生から8分後には校長が大平山(おおひらやま)への全校避難を決断した。

佐藤さんは児童が不安にならないよう「探検ごっこ」のように声をかけ、避難した。泣いている児童には近くの友達が「大丈夫だよ」と励ました。

先生が山の入り口を探している。「先生！こっちだよ」と児童が道を教えた。車いすの児童は担任の先生が背負って、大平山までの2.5以上の道のりを進み続けた。津波が山際をのみ込んだのは、避難が済んでわずか5分後だった。避難中に児童は迫る津波を見ずに済

み、佐藤さんは「誰も心に傷を負わなくてよかった」と胸をなで下ろした。その後、大平山を下りた佐藤さんらは、いわき市のトラック運転手と出会った。運転手は荷台に児童らを乗せ、役場まで運んでくれた。全員、町の体育館に避難できた。

「あなたの大平山はどこですか」。佐藤さんは問いかけた。震災の記憶が薄れてはいないか。「地震、津波に限らず川の増水や噴火など、どう逃げるか考えてほしい」。残された校舎を見つめ、佐藤さんは教訓を訴えている。(本間・小島)

自ら震災を経験したからこそ取材には臨場感があり共感を持てた。(筑波大附属視覚特別支援学校高等部1年大津慶悟) 僕は、この学習を生かし地域の人に広めていきたいです。(富田中2年 須田優音)



5班編集後記



津波避難の経験を語る佐藤さん